私の日韓交流記

若　者

幸　田　勝　典*

はじめに

韓国を意味する英語の“Korea”は，中世（日本の鎌倉時代）の高麗王朝が語原らしい．しかし，日本との交流の歴史を辿ると記録上は1～2世紀にまでさかのぼることが出来る．それから現代まで約2000年という長い期間に亘ってさまざまなレベルでの交流が行われて来た隣国同士であるにも拘わらず，相手国に対しての理解がお互いに乏しい印象がある．特に，戦後における日本は，欧米に追い付け追い越せをスローガンに国を挙げて産業の発展に努めていたため，韓国を含めたアジア諸国に対しての関心や配慮が足りなかったのではないだろうか．そして，今日，戦後補償問題，あるいは従軍慰安婦問題等として，50年近くたった今，無関心の代償として諸問題が両国間に噴出しているかのようである．『韓国は，近くて遠い国』と言われるが果たしてそうなのであろうか？

昨年（1993年）8月，日本の大阪大学と韓国のKAIST（Korean Advanced Institute of Science and Techology）との間でバイオテクノロジーに関するシンポジウムが開催される事になった．これは，大学院生レベルでの両国間の学術交流を促進させることが第一目標であり，そのシンポジウムに大学院生である私が大阪大学から出席することが決まったのは6月頃であった．日本の大学院生が，国際的なシンポジウムで発表することだけでも，非常に稀なことなのに，開催地がKAISTのあるテジョン（大田）で，しかも英語での口頭発表という事を聞いて私は，とても責任が重大なのではないかと思った．実際，海外へ行くのはこれが初めてで，しかも英語が得意なわけではない私なので，自信など全くなかったが，未体験のものに対しての好奇心に加え，何かをやり遂げてみたいという意欲もあり，シンポジウムへの出席を承諾致しました．ここでは，期待と不安に包まれた私の韓国旅行？の印象を思いつくままに紹介させて戴きたい．

*Katsunori KOHDA
1969年2月26日生
大阪大学工学部醗酵工学科卒業
現在，大阪大学大学院工学部醗酵工学科今中研究室，学生（修士2年）平成6年博士課程に進学の予定，学士（H6年で修士取得），バイオテクノロジー
TEL 06－877－5111（内線4353）

私の見た韓国

合同シンポジウムは次のような日程で行われた．

1993年8月23日	午前	大阪出発，ソウル到着
	午後	韓国フォークビレッジを見学後テジョンへ KAISTにてWelcome reception
8月24日	午前	セミナー
	午後	セミナー，講演
8月25日	午前	セミナー
	午後	セミナー
8月26日	午前，午後	Expo'93を見学 Fairwell party
8月27日	午前	テジョン出発プサンへ，プサン（釜山）見学
	午後	プサン出発，帰国

学生編成 D1　1人，M2　6人，M1　1人

飛行機を降りた私は，初めての外国である韓国がどんな国なのか興味を抱きながら入国した．しかし，ソウルに到着してこの街の風景を見た瞬間，自分はまだ日本にいるのではないかとい

う錯覚に陥ってしまった．なぜなら，ソウルの景色は日本の風景として例えられる山紫水明とよく似ており，そびえる山，流れる川，街ゆく人などの雰囲気はどれをとってもまるで日本の一都市の風情なのであった．また，フォークビレッジ（民族村）という昔の家屋が建ち並んでいる史跡を見学したが，ここも日本の昔の建物とよく似ているため，飛鳥時代か奈良時代にタイムスリップした様な感覚にとらわれはすれど異国情緒からは程遠い印象であった．

このように外国にいる事を殆ど感じなかった為に，韓国を以前よりはるかに身近に感じる事ができ，また，この国に短時間で慣れる事ができたと思う．しかし慣れるに従い，そんな私にも，少しずつ日本との違いが分かるようになりだした．そこで，私自身が気付いた点を幾つか挙げてみたい．まず都市については，人口のばらつきが目立った．つまり，ある所には建物が集中して林立している反面，無い所には全くないという状態が目立った．人口密度が日本より低いためそう見えるのかもしれないが，それにしても極端である．現に，聞くところによると全人口の約4割が首都ソウルに集中しているそうである．住居自体はマンションが多く，一戸建は余りみられなかった．また，交通事情に目を向けると，韓国人の運転の荒さが目に付き，日本で運転が荒いと思われている我々関西人の目から見ても，結構危険な場面が多々あった．道路を走る自動車は，一見日本製にみえるが，実は全て韓国製のもので日本車をはじめ外国車は一台も見かけることはなかった．そして，日本と違い道路は右側通行であり，これは『ああ外国にいるんだな.』とすぐ思える数少ない風景でもあった．

国全体の雰囲気としては入国してから常に感じていた事であるが，人にしても，街の様子にしても現在の日本よりもエネルギーに満ち溢れており，現在『漢江の奇跡』といわれる高度成長期を，オリンピック，万国博のような国家的事業が後押しする韓国らしい一面であるといえる．それと，この国の人々は白黒がはっきりしている．つまり，YES，NOが明確な国民性を持っている．同じアジアの韓国でさえこうなのにYES，NOが曖昧な日本は世界の中でやはり特殊ではないだろうかとさえ思った．

KAISTにて

Korea Advanced Institute of Science and Technology通称KAISTはソウル大学に並ぶ韓国屈指の大学院大学である．最近，首都ソウルからテジョンに移転したばかりで，校舎は新しく敷地面積（1,213,198m^3）は，我々の大阪大学吹田学舎より広い．学生は大学院生のみで修士過程よりも博士過程の学生の方が多く，博士過程は授業料が免除されているらしい．また研究室内部において，一人あたりのスペースは非常に広く設備も充実しており，このような恵まれた環境で実験出来るとは羨ましいとさえ思えた．ここで勉強している学生についてであるが，何と言っても英語がとても上手であった．空港からKAISTまでは学生の車に載せてもらって移動した訳だが，その間の車内の会話では向こうが話し掛け，こちらが何とか答えるという形式が主になってしまい，韓国の学生の英語力に感心すると同時に，自分の英語力のなさを痛感した．KAISTに着いてからの彼らの歓迎振りは熱烈であり，セミナーが終わってからも，今若者の間で流行っているらしいディスコを始め，飲みに行ったりドライブに行ったりといろいろなところに我々を案内してくれた．しかし，エネルギッシュな国民性のためか，多少強引なところもあったので，正直言って彼らに付き合うのは少々疲れた．彼らは終始元気で，酒は強いし，そのパワーの源は一体どこから来るのだろうか，やはり毎日キムチを食べているからなのだろうか？等とつまらぬ想像したりもした．

さて肝心のシンポジウムの方であるが，全体的には，大阪大学が遺伝子工学，生化学が中心だったのに対し，KAIST側は培養工学が中心であった．英語で発表しなければならない事は我々にとってはかなりの負担となり，準備で手間取ったのは勿論，いざ発表の時には，話す方は何とかなったが質疑応答では相手の話す英語を聞き取れないのでその応答に皆，四苦八苦という有り様だった．また私は学生代表でもあったので，発表以外にも英語で話さなければなら

ない機会が多く，適当な英文を思い付くのに一苦労した．だいたい，多くの日本人は英語から日本語への変換は割りと出来るが，日本語から英語への逆変換はさっぱりなような気がする．一方，韓国側の学生達は話すのも流暢で，質問時のやりとりなど私達より格段に上手であった．どうしてこうも違うのだろうか．学生に聞いてみるとKAISTでは年に数回行われる英語によるセミナーで全員英語での発表には慣れているとの事であった．

このように，最初，我々の英語力は比べ様もなくお粗末そのものだったが，韓国の学生と会話する手段としていやがおうでも英語を使わなければならなかったので，次第に簡単な会話ならできるようになり，互いに意志の伝達もできるようになっていった．学生と話していて感じたことは，彼らは現在の日本，そして日本の学生に対してかなりの関心をもっているということである．『日本にこういうものはあるのか?』とか，『日本の学生は休日どんなことをしているのか?』と質問をしてきたり，『日本の野球選手の落合選手はgood playerだ．君はどんな選手が好きなのか』とか話しかけて来たりと誠に関心が深い．また，Expoで日本館の前に長蛇の列を成していた事からも，日本に対する関心の高さを見ることが出来る．そしてこのことは，逆に我々に，韓国に対する関心の無さを改めて認識させることでもあった．これまでの私は，英語を欧米人との交流手段という程度に認識していたが，実は，アジアを含めた世界中の人々と，より深くお互いを理解し，学問的交流を進めるための媒体として，英語が重要な役割を担っていることを強く感じ，帰国後は少しずつではあるが研鑽につとめている．

このシンポジウムは，もちろん成功に終わったと思うが，言語の壁のため会話がスムーズに行かず表面的な相互理解しか出来なかった事が残念である．しかし，そこは若者同士，身振り手振りのなかからお互いを理解し，次第に交流を深めることができたのは私にとって大きな喜びであり，帰国時には爽やかな満足感を味わうことができた．

終わりに

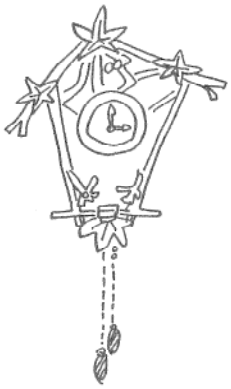
KAISTを離れプサンへと向かう汽車の中で，車窓に写る景色を眺めながら，日韓がお互いを『近くて遠い国』にしている原因は何かを私なりに考えてみた．古来，文化は中国，韓国を経て日本へと流れていた．ところが現代ではこの流れが逆流する事態が起こっている．そして，これは日韓交流2000年の歴史の中で両国が初めて体験する事でもある．

この事実に対して我々が無関心であることが，相互理解を妨げる一つの原因であろう．

そしてもう一つは，太平洋戦争の不幸な傷痕の解釈において，YES/NOをはっきりさせる韓国人気質と，和をもって貴しとなす日本人気質との間で，誤解やわだかまりが生じ，そしてそれらを，隣国であるがゆえにまた長く引きずっているからではないだろうか．

ともあれ，今回の韓国旅行は，我々参加者にとっては大変貴重な体験，また勉強にもなった．同じ学問を探究する研究者の卵として，大学院生が交流し，また楽しい一時を過ごせたことは，今後の私の研究姿勢にも少なからずよい影響が出てくるものと確信している．

今回のシンポジウムの成功により，本年は日本側がホストとなって開催される事が決まり，今回以上に充実したシンポジウムになることであろう．私も，次回のシンポジウムに照準を合わせて，もっと英会話の勉強に励み，韓国学生との活発な交流，議論の為の準備を重ねたいと思っている．そして，積極的な韓国学生達と学

術的な交流を推し進めるうえで，またその輪を更にアジアに，そして世界中に広げることも夢ではないような気さえした．

最後になりましたが，この度の日韓バイオテクノロジーセミナーにご引率していただきました工学部応用生物工学科教授高野光男先生，助手森川正章先生，また，執筆を勧めていただきました同教授今中忠行先生並びに，口頭発表の準備を手伝ってくださった同助手高木昌宏先生に深く謝意を表します．